

幸若舞の本における胡麻点の用法に関する考察 —毛利家本歌謡集 3 種の分析と比較—

A Study of Usage of Goma-ten in the Books of Kōwakamai:
Analysis and Comparison of Three Kinds of Mōrike-bon-kayō-shu

武 藤 綺 音

MUTOH Ayane

Kōwakamai, originating in the 15th century Japan, is a dance with vocal music in recitative style. Despite its remarkable popularity from the Sengoku period to the Edo period, it has declined today and the traditional method of the musical notation seen in the Books of Kōwakamai, which the lyrics are recorded in, is no longer systematically comprehended. This paper surveys the usage of Goma-ten, the most basic element of notation for Kōwakamai music, through analysis and comparison of three kinds of Mōrike-bon-kayō-shu (Anthologies of Songs in the Mōri-family print of the Books of Kōwakamai).

はじめに

幸若舞は、15 世紀頃、越前国朝日郷（現、福井県丹生郡越前町朝日）を発祥地として成立した伝統芸能で、物語を語りながら舞を舞うというものである。その音楽性と成立年代から、仏教声楽である声明に端を発し、千年以上続く「語り物」という日本音楽の一大系譜の中心に位置付けられる¹が、現在では衰退著しく、謎に満ちた芸能となっている。かつては、武士階級と結びついて全国的に台頭した本流「越前幸若流」と、九州へ伝播して比較的様々な階級に親しまれた傍流「大頭流」という二つの流派が存在し、ともに戦国から江戸期にかけて隆盛を誇ったが、明治維新による武士階級の消滅に伴い、越前幸若流が断絶し、現在は全国で唯一、福岡県みやま市瀬高町の大江という集落に、大頭流の伝承が残っている。

幸若舞に関する研究は、音楽学、文学、国語学、社会学といった幅広い分野にまたがるが、いずれも、

¹ 幸若舞の「語り」のメロディーは、言葉のアクセントを強く反映した簡素なものであり、旋律自体の芸術性よりも、言葉の正確な伝達を意図している。日本音楽研究において、こうした特徴をもつ音楽は「語り物」と呼ばれ、箏曲のような華やかな旋律を持つ「歌い物」と対置されてきた。語り物には幸若舞のほかには平曲、能、浄瑠璃なども含まれる。こうしたカテゴリゼーションについては、蒲生（2002）に詳しい。

越前幸若流の断絶後に本格的な開始をみた²。こうした先行研究においては、大江の地に残る実際の上演の形態と、双方の流派で受け継がれてきた史料、そのなかでも特に「本」とよばれるものが、主要な対象とされてきた。本は、幸若舞の語りのテキストを記した史料を指し、室町から昭和に至るまでの様々な時期にかけて、数多く制作されている。一部の本は、テキスト中の各文字に傍記される記号「胡麻点」をはじめとする、音曲ならびに演出上の指示に関わる要素を併載しており、幸若舞曲の実質的な楽譜に相当する。ところが、本は、文学においては第一義的な研究材料である一方、音楽学の立場からはほとんど採り上げられてこなかった。その原因として、幸若舞の伝承の現場で、本によらない口頭での伝習が原則となっていること、そのために、本における記譜のメカニズムが、伝承者自身にも理解されなくなっていることが挙げられる。しかし、現存の上演形態の観察と分析に偏重した従来の音楽学的研究の方法には、限界があると言わざるを得ない。伝承の衰微に伴い、いくつかの曲目やメロディックパターンは、既に人々の記憶から失われている。本に記譜されたものの解明は、この問題を克服しうる唯一の手段であり、それによって始めて、一貫した楽曲分析や、曲ごとの比較が可能とされ、最終的に、語り物全体を対象とした巨視的研究へも大きく資すると思われる。

本研究は、その第一段階として、幸若舞の本において、どのような種類の胡麻点が出現し、どのような性質を有するかを考察することを目的としている。本稿における調査の方法は次の通りである。幸若舞がメロディーと言葉との強い紐帯を特色とする語り物芸能であることに留意し、テキストの統辞論的特徴との関連に着目する視点から、胡麻点の出現法則の分析を行う。さらに、これを共通するテキストを持つ複数の本に対して行った上で、分析結果の比較を行う。これは、一定のテキストに対する胡麻点の用法に、本の種類によるゆれがあるかを検討することで、胡麻点の性質をより多面的に捉えることを意図したものである。調査対象とする本には、「毛利家幸若安信本」(1618年成立、以下簡単のため「安信本」と表記)、「毛利家幸若長明本」(1688年成立、以下「長明本」)、「毛利家幸若直政本」(1690年成立、以下「直政本」)を採り上げた。

1. 安信本、長明本、直政本の特徴

本項では、調査対象とした本について、成立背景、史料分類上の位置、内容といった特徴を、選定の理由とあわせて記述する。

先に言及したように、幸若舞の本には、様々な時代に成立したものが数多く存在し、また、その用途も多岐にわたっている³。今回の調査対象である安信本、長明本、直政本は、そのなかから、(1)

² 幸若舞研究の初期における最大のものは笹野(1938)ならびに笹野(1943)である。笹野堅は、国文学者としての観点から、幸若舞の多くの一次史料を体系的に世に紹介した。音楽学では、能の形式を構造的に捉える「積層性理論」が横道(1960)によって提唱されて以降、これを共通のフレームワークとして、語り物諸芸能の音楽の分析が実践されるようになった。幸若舞におけるそうした研究としては、蒲生・久万田(1990)が挙げられる。

³ ほとんどの本は、上演者らにいわば台本として作成および所持されたが、江戸時代には、大頭流のテキストをもとに一般大衆のための読み物として作られた版本が存在した。当然ながら、そうした本は胡麻点のような「記譜」の要素を持たず、代わりにしばしば挿絵を有していた。

胡麻点の記載があり、なるべくその数が多く、精度が高い⁴こと、(2) 成立過程からも、内容の正当性が高いと考えられること、(3) 入手または閲覧が容易、少なくとも可能であること、(4) 比較を可能とするため、互いに共通するテキストを持つこと、という基準により選定された。

安信本、長明本、直政本は、いずれも 17 世紀に越前で成立した「毛利家本」とよばれる一群の本に含まれる。毛利家本は、毛利家家臣が越前で幸若舞を習得した際に相伝されたもので、成立の歴史的経緯が明らかである上、複数の幸若太夫（家元）の署名が認められることから、内容の信頼性が高い⁵。村上學は、毛利家本を評し、「近世極初期の越前幸若系の揃物としては由来の最も明瞭なもの⁶」と述べている。現在、原本を防府毛利報公会博物館が所蔵しているほか、影印⁷が横山・村上（1980）として出版されており、閲覧は容易である。

毛利家本は計 40 冊からなるが、うち 5 冊はさらに「歌謡集」とよばれるグループに分類され、安信本、長明本、直政本のほか、胡麻点の記載をもたない 2 冊がこれに相当する。歌謡集は、毛利家本のうちのみに限られない分類概念で、幸若舞から派生した芸能「幸若歌謡」の上演テキストを記した史料を指す。幸若歌謡は、既存の長大な幸若舞曲から聴かせどころのみを抜粋し、ダイジェスト版のような形で上演したり、上演時間の短い新曲を制作したりするといった形態で行われた、いわば短縮版幸若舞といえる芸能である。したがって、歌謡集は抄本としての性格を持ち、このことは、筆者の試みる記譜法研究に極めて大きく寄与する。朗読的なスタイルを持つ語り物である幸若舞においては、記譜法を考察するには、各曲のなかの最も節付けが豊かな部分、すなわち「聴かせどころ」に、まず焦点を集中させる必要があるためである。

なお、安信本、長明本、直政本について、成立年、収録曲・章段数、制作者といった基本的な情報を表 1 にまとめた。テキストの共通箇所を含む収録曲と章段の詳細については、稿末の表 5 を参照されたい。

表 1 毛利家本歌謡集 3 種の概要（柴田 2013: 91 より作成）

名称	毛利家幸若安信本	毛利家幸若長明本	毛利家幸若直政本
成立年	1618	1688	1690
収録曲・章段数	12 曲 計 16 章段	21 曲 計 25 章段	7 曲 計 7 章段
制作者（署名）	幸若小八郎安信	幸若庄太夫長明	幸若八郎九郎直政

⁴ 成立過程をめぐる先行研究において、別の本からの書写の際に生じたミスを指摘されていないもの。

幸若舞の権威である太夫の署名には、内容の正当性を保証する役割があり、そうした署名を持つ本は、特に「正本」といわれ、他と区別されてきた。ある本が正本かどうかという問題は、伝承の場だけでなく、研究においてもしばしば重要視される。

⁵ 村上 2004: 104。なお、先行研究では、越前幸若流の上演形態に基づいた本を「越前幸若系」、大頭流の形態に基づいた本を「大頭系」として分類している。

⁷ 底本を写真撮影し、それを原版として制作した複製本をさす。これに対し、底本の内容を活字に組み直して新たに出版したものは「翻刻」という。

2. 幸若舞の本にみられる記譜の構成要素

分析の実践に先立ち、幸若舞の本にみられる記譜の構成要素を整理しておきたい。ここでいう記譜の構成要素とは、音曲や演出の指示に関わる記号や注記を指す。基本的に、どのような要素をどのように用いるかという記譜法のコンセプトには、本や流派による違いはみられない。したがって、本項では、図1に引用した長明本中の一節を例に、全要素を(1)曲節型名、(2)「上」、「中」、「下」といった表示、(3)その他文字による注記、(4)胡麻点の4種類に大別し、それぞれの働きを説明する。

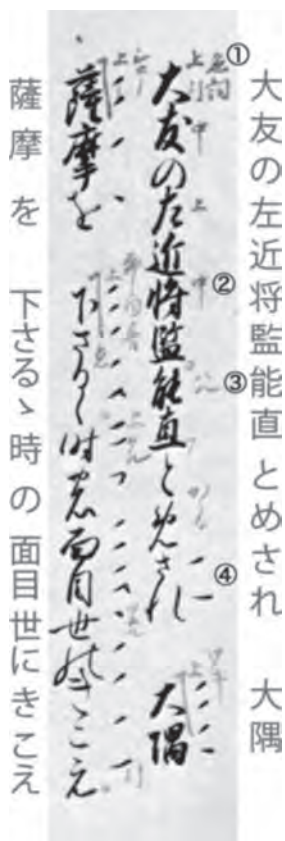


図1 長明本《十番切》より
(横山・村上 1980: 481)

※活字、丸囲み数字は筆者による。

(1) 曲節型名 (図1: ①)

その箇所を歌う際に用いられるメロディックパターン、「曲節型⁸」の種類を示す。曲節型の種類には、主なものに〔コトバ〕、〔カカル〕（または〔カカリ〕）、〔サシ〕、〔イロ〕、〔フシ〕、〔ツメ〕やそれらの複合態があり、この例では〔色詞（イロコトバ）〕が示されている。幸若舞の伝承者は、各曲節型の歌い方を名前と紐付けて諳んじており、したがって、曲節型が演奏上の実質的な基礎単位といえるが、古い本には、しばしば大江の地に現存しない曲節型が認められ、その復元には、以下に述べる他の要素の解明が待たれる。

(2) 「上」、「中」、「下」といった表示 (図1: ②)

能楽の謡本にみられる同様の表示「出音記号⁹」との類似から、曲節型内部での核音の音高の推移を示す可能性があるが、詳細は不明。

(3) その他文字による注記 (図1: ③)

3人の歌い手（「舞方」）のうち、誰がその部分を歌うかを指示する「シテ」「ワキ」といった文字列や、発声法やアーティキュレーションに関する指示とみられる「ハル」「ノル」といった文字列。ここでは「ハル」とある。

(4) 胡麻点（胡麻、胡麻章、墨譜） (図1: ④)

テキストの一文字ずつに付せられた、主として短い線分状の記号。絶対的音高を持たない朗読的な曲節型〔コトバ〕の適用範囲には現れないことから、一音単位の音高や節回しに関わるとみられるが、(2)同様、現在の伝承者には理解されなくなっている。

3. 毛利家本歌謡集3種の分析・比較

本項では、安信本、長明本、直政本に対して実施した、胡麻点の用法に関する分析の結果と、結果の比較から得られた所見を述べる。なお、ここでいう胡麻点の用法とは、それぞれの本において

⁸ 曲節型を基礎単位として構成される幸若舞の楽曲構造については、蒲生・久万田（1990）に詳しい。

⁹ 横道萬里雄の用語による。（横道 1992: 248）

どのような種類の胡麻点が使われているかという問題、ならびに、ある胡麻点と、あるテキストの統辞論的特徴との間には、どのような関係が認められるかという問題である。分析を行う範囲は、各本において、少なくとも他の一つの本とテキストが共通している部分に限る。具体的には、安信本、長明本、直政本のすべてにおいて、共通する《兵庫》、《四国落》、《文覚》、《老人》の 4 章段、また、安信本と長明本において、《大織冠》、《百合若大臣》の 2 章段、そして、長明本と直政本において、《松の枝》、《山科》の 2 章段である。

分析にあたっては、横山・村上（1980）に収録されている影印を参照した。各曲のテキストの本文は、紙幅の都合上、すべてをここに記載することはできないが、柴田（2013）に翻刻¹⁰があるので、あわせて参照されたい。

3-1. 安信本

安信本において、《兵庫》、《四国落》、《文覚》、《老人》、《大織冠》、《百合若大臣》の 6 曲を調査したところ、計 10 種類の胡麻点が確認された。これらを形状の特徴によって便宜的なグループに分類し、出現する曲目と曲中の位置とあわせ、表 2 に示した。

表 2 安信本中の 6 曲にみられる胡麻点一覧

グループ	種類	形状	出現曲目と位置（下線で表示、出現順）
直線	①	—	《四国落》（「されは」）、《兵庫》（「霞【かすみ】の <u>うち</u> の」）など全曲を通じて頻出
	②	＼	《四国落》（「されは」）、《兵庫》（「霞の <u>うち</u> の」）など全曲を通じて頻出
折れ線 （対称）	③	∧	《百合若》（「帆」）
	④	∨	《大織冠》（「送りけり」）、《四国落》（「事やらん」）
折れ線 （非対称）	⑤	ㄥ	《兵庫》（「内【うち】」、「ひとり」）、《四国落》（「浦【うら】」、「津の」、「あしや」）、《文覚》（「ちりしきて」、「ぬれて」、「ふしに」、「上【じやう】」、「絃【げん】」、「なかは」）、《大織冠》（「さし」、「 <u>す</u> せんはんりを」）、《百合若大臣》（「涼しく」、「あけにける」）
	⑥	ㄣ	《文覚》（「講【かう】」）、《大織冠》（「みやうしうの」）
曲線	⑦	）	《老人》（「かくや」、「しられたり」）
	⑧	つ	《四国落》（「なう」）、《老人》（「うちには」）、《大織冠》（「葉」、「追手」）、《百合若》（「よろこひの」）
	⑨	ㄣ	《文覚》（「ちりしきて」）、《老人》（「いつも」）
複合的	⑩	ㄥ	《兵庫》（「朝露に」）

以下、表 2 におけるグループごとに、調査を通じて認められた安信本の胡麻点の出現法則と、推測される特性について述べる。

直線グループ

全曲を通じて出現する。また、出現する箇所には適用されている曲節型や、テキストの統辞論的あるいは発音上の特徴は様々であり、翻っていえば、「どこにでも現れる」胡麻点であるといえる。語り物を対象にした国語学的先行研究¹¹をみるに、この 2 種類の胡麻点は、日本語のアクセント

¹⁰ 註 7 を参照。

¹¹ こうした研究は数多いが、声明を採り上げた一例として、金田一（2003）が挙げられる。

を反映しており、したがって、音高の上下を示すといった基礎的な機能を持つと考えられる。

折れ線（対称）グループ

全例が曲節型「ふし」または「かゝるふし」の内部に出現する。したがって、フシ類の曲節型の唱法と関連している可能性がある。

折れ線（非対称）グループ

⑤は全例が曲節型「ふし」または「かゝるふし」の内部にみられ、したがってフシ類の曲節型の唱法と関連している可能性がある。

⑥は、《文覚》における例が「かゝるふし」の内部にみられる一方、《大織冠》における例は「色」の内部であり、曲節型との関連は特に指摘できない。発音上の観点からいえば、母音 /o/ との関連を指摘しうるが、2 例しかなく、断定は難しい。

曲線グループ

⑦は 1 曲のうちの 2 箇所に出現するに過ぎず、これらのわずかな例から特性を判断するのは尚早であるが、両箇所とも「ふし」の内部であること、母音 /a/ との関連の可能性という 2 点を指摘しうる。

⑧は、《四国落》の「なう」、《老人》の「うちには」、《大織冠》の「葉」の 3 例において、長音との関連を指摘できる¹²。また、《大織冠》の「追手」では促音の直後の音に付いている。これらのことから、通常と異なる音価をもつ音について注意を促すものである可能性があるが、《百合若》の例における「ひ」の音価は、通常であるため、当てはまらない。

⑨については、母音 /i/ との関連を指摘しうる。しかし 2 例しかなく、7 同様に特性を断定することは難しい。これについても、他の曲における例を探し、検討する必要がある。

複合的グループ

⑩は、複合的な形状を持つ単独の胡麻点ではなく、②と⑤という二つの胡麻点を一つの音に対して割り当てたものとみることでもできる。ただし、この「に」の音は産み字の対象ではなく、通常の音価で歌われると考えられるため、胡麻点が二つ付くのは不自然である。また、長明本において、同じ箇所に複合的な形状の胡麻点（長明本⑩）が付せられている。なお、この胡麻点の具体的な機能については、出現例が一つしかないため、推測することは難しい。

¹² 《老人》の「うちには」は、七五調で書かれたテキスト中の 5 音からなるべき 1 句に、実際には 4 音しか含まれていないという箇所であり、こうした箇所を歌う際には、うち 1 音の音価を倍にするという処理がなされる。したがってこの「は」は「は一」という長音となる。なお、日本音楽全般にわたって、こうした処理を「産み字」という。

¹³ 註 12 を参照。

以上、安信本における10種類の胡麻点の性質を述べた。

3-2. 長明本

長明本において、《兵庫》、《四国落》、《文覚》、《老人》、《大織冠》、《百合若大臣》、《松の枝》、《山科》の8曲を調査したところ、計16種類の胡麻点が確認された。これらを形状の特徴によって便宜的なグループに分類し、出現する曲目と曲中の位置とあわせ、表3に示した。

表3 長明本中の8曲にみられる胡麻点一覧

グループ	種類	形状	出現曲目と位置（下線で表示、出現順）
直線	①	—	《老人》（「老人【 <u>らうじん</u> 】は」）、《兵庫》（「 <u>かく</u> やらん」）など全曲を通じて頻出
	②	＼	《老人》（「 <u>わか</u> くなり」）、《兵庫》（「 <u>霞</u> の <u>うち</u> の」）など全曲を通じて頻出
	③	/	《老人》（「 <u>わか</u> くなり」）、《兵庫》（「 <u>霞</u> 【 <u>かすみ</u> 】の <u>うち</u> の」）など全曲を通じて頻出
折れ線 (対称)	④	∧	《大織冠》（「 <u>湊</u> より」）
	⑤	∨	《四国落》（「 <u>浦</u> 【 <u>うら</u> 】」）、《文覚》（「 <u>さむ</u> からて」）、《老人》（「 <u>富貴</u> の」）、《百合若大臣》（「 <u>涼</u> しくて」）、《松の枝》（「 <u>ひ</u> なつもの、 <u>よ</u> は <u>ひ</u> 、 <u>君</u> 【 <u>きみ</u> 】」）、《山科》（「 <u>う</u> へて、 <u>松</u> むし」）
	⑥	>	《四国落》（「 <u>荻</u> 【 <u>おぎ</u> 】」）
折れ線 (非対称)	⑦		《兵庫》（「 <u>す</u> かた、 <u>やら</u> ん、 <u>け</u> るも、 <u>け</u> れと、 <u>き</u> くも、 <u>ひ</u> とり」）、《四国落》（「 <u>里</u> の名、 <u>様</u> 【 <u>さま</u> 】、 <u>あ</u> しや、 <u>やら</u> ん、 <u>わか</u> 君と」）、《文覚》（「 <u>庭</u> 【 <u>には</u> 】、 <u>散</u> 【 <u>ちり</u> 】、 <u>村</u> 雨にぬれて、 <u>折</u> 節に、 <u>雲</u> 上【 <u>うんじやう</u> 】、 <u>講</u> 【 <u>かう</u> 】」）、《老人》（「 <u>わか</u> くなり、 <u>老</u> もせず、 <u>と</u> かや、 <u>長</u> 生殿【 <u>ちやうせい</u> でん】の <u>うち</u> には、 <u>お</u> も <u>ひ</u> られたり」）、《大織冠》（「 <u>風</u> 【 <u>かぜ</u> 】に、 <u>あ</u> けて <u>数</u> 千 <u>万</u> 【 <u>ばん</u> 】 <u>里</u> を送【 <u>おく</u> 】 <u>り</u> けり」）、《百合若大臣》（「 <u>帆</u> を <u>そ</u> あけにける」）、《松の枝》（「 <u>い</u> は <u>ほ</u> のかたに、 <u>亀</u> の、 <u>よ</u> ろ <u>つ</u> よも、 <u>な</u> き、 <u>な</u> れや、 <u>こ</u> ころ、 <u>清</u> き、 <u>あ</u> りかたき」）、《山科》（「 <u>い</u> にしへも、 <u>ひ</u> く、 <u>水</u> 鳥の、 <u>風</u> 【 <u>かぜ</u> 】、 <u>草</u> に、 <u>な</u> るは、 <u>な</u> らむ、 <u>し</u> たに <u>て</u> も、 <u>と</u> かや」）
	⑧		《四国落》（「 <u>つ</u> の、 <u>浦</u> の」）、《文覚》（「 <u>桜</u> 【 <u>さくら</u> 】、 <u>木</u> の、 <u>花</u> の、 <u>雪</u> は、 <u>山</u> ほと <u>と</u> きす、 <u>さ</u> わたる、 <u>管</u> 絃講は」）、《老人》（「 <u>老</u> 【 <u>おい</u> 】も、 <u>な</u> る、 <u>か</u> くや、 <u>大</u> 織冠（「 <u>さ</u> ほを、 <u>数</u> 千 <u>万</u> 里を」）、《百合若大臣》（「 <u>は</u> やく、 <u>帆</u> を <u>そ</u> じ、 <u>松</u> の枝（「 <u>松</u> の」）、《山科》（「 <u>山</u> 科の、 <u>まつ</u> そ <u>ひ</u> く、 <u>宮</u> の、 <u>か</u> はらぬ」）
	⑨		《兵庫》（「 <u>あ</u> くまで、 <u>身</u> にあまり、 <u>う</u> ちの」）、《四国落》（「 <u>と</u> もいふ」）、《文覚》（「 <u>さ</u> むからて」）、《百合若大臣》（「 <u>風</u> も、 <u>涼</u> しくて、 <u>し</u> ら <u>山</u> の」）、《松の枝》（「 <u>つ</u> るの、 <u>か</u> たに」）、《山科》（「 <u>う</u> へて、 <u>け</u> ん、 <u>こ</u> や」）
	⑩	┐	《文覚》（「 <u>雲</u> 上の」）、《百合若大臣》（「 <u>か</u> んとりも」）、《松の枝》（「 <u>ひ</u> ろき、 <u>め</u> くみそ」）、《山科》（「 <u>山</u> 【 <u>やま</u> 】の、 <u>松</u> 【 <u>まつ</u> 】の、 <u>色</u> 【 <u>いろ</u> 】」）
	⑪	つ	《老人》（「 <u>富貴</u> の」）、《大織冠》（「 <u>葉</u> 、 <u>追</u> 手」）
曲線	⑫		《百合若大臣》（「 <u>あ</u> けにける」）、《松の枝》（「 <u>う</u> こきなき、 <u>こ</u> ころ、 <u>山</u> 科（「 <u>ま</u> さるへき、 <u>草</u> に、 <u>し</u> たに <u>て</u> も、 <u>松</u> の」）
	⑬		《老人》（「 <u>う</u> ちに <u>は</u> 」）
	⑭		《百合若大臣》（「 <u>き</u> えけれは」）、《老人》（「 <u>と</u> むなるも」）
複合的	⑮		《兵庫》（「 <u>朝</u> 露に」）
	⑯		《兵庫》（「 <u>あ</u> くまで、 <u>百</u> 合若大臣（「 <u>吹</u> 【 <u>ふく</u> 】」）、《松の枝》（「 <u>君</u> かため、 <u>山</u> 科（ <u>壬</u> 年の」）

以下、表3におけるグループごとに、調査を通じて認められた長明本の胡麻点の出現法則と、推測される特性について述べる。

直線グループ

全曲を通じて出現し、出現箇所に適応されている曲節型や、テキストの統辞論的あるいは発音上の特徴は様々である。これらのことから、安信本における直線グループの胡麻点と同様の働きをしているといえる。ただし、長明本に特徴的なこととして、(1) 胡麻点①・②に加えて③を使用して

いること、(2) 胡麻点の形状と「上」、「中」、「下」表記を連動させる傾向にあること、という2点が挙げられる。

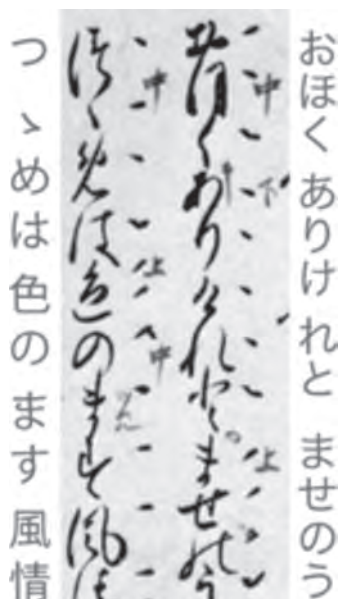


図2 長明本《兵庫》より（横山・村上 1980: 480 活字筆者）

折れ線（対称）グループ

④ならびに⑥については、それぞれ1例しかないため、機能を推測することはできない。

⑤については、句頭や句末には現れず、句の2～3音目に付せられているということが指摘できる。

安信本における折れ線（対称）グループとは異なり、長明本のこのグループの胡麻点は、[カヽリ]や[サシ]といったフシ類以外の曲節型の適用範囲にも出現し、特定の曲節型との結びつきはみられない。形状こそ共通しているが、安信本と長明本では、異なる機能を持った胡麻点である可能性がある。

折れ線（非対称）グループ

⑦は、《兵庫》における6例をはじめとして、文節の末尾に多く出現しているが、語中に現れるケースもある。また、文節末でなく語中にみられる④は、曲の終わりに出現する傾向がある。これらのことから、異なる2系統の機能を、この1種類の胡麻点が担っている可能性がある。

⑧は、《四国落》、《大織冠》、《松の枝》の3曲においては、一貫して語末または文節末の1音に付せられている。他の曲においてもこの傾向は強いが、例外もみられる。

⑨は、必ず文節の末尾の音に付せられている。また、曲の前半に多く出現し、後半になるにつれて徐々に出現数が減っていくという傾向がみられる。

⑩は、《山科》では語頭に付せられているが、他の曲では文節末に現れる。したがって、《山科》

ではこの胡麻点の使用基準が異なっているとみられる。

なお、このグループの胡麻点は、全て曲節型〔フシ〕の適用範囲に現れている。

曲線グループ

⑪は、《老人》では促音に対して、《大織冠》では長音と促音の直後の音に対して付せられている。安信本⑧の一部と同様に、通常と異なる音価を持つ音に関連している可能性がある。

⑫は、全 7 例のうち 4 例で、同じ形状である安信本⑨と同様に、母音 /i/ との結びつきがみられる。一方で、他 3 例においては、母音 /o/ と結びついている。前者については、出現箇所からみても、安信本⑨との関連性を指摘することはできるが、長明本におけるこの胡麻点について、現時点で機能を断定することは難しい。

⑬がみられるのは 1 例のみであるが、産み字の対象である「は」に付せられている点は注目に値する。安信本と比較すると、長明本では、元から長音として記されている長音と、上演に際して長音に変換される短音を書き分けようと試みている可能性がある。

複合的グループ

全例とも曲節型〔節〕の内部であることから、複合的グループの胡麻点は〔節〕の唱法と関連している可能性がある。一方、テキストの統辞論的あるいは発音上の特徴との関連は認められない。なお、⑮の出現位置は安信本⑩と対応している。

以上、長明本における 16 種類の胡麻点の性質を述べた。

3-3. 直政本

直政本において、《兵庫》、《四国落》、《文覚》、《老人》、《松の枝》、《山科》の 6 曲を調査したところ、計 8 種類の胡麻点が確認された。これらを形状の特徴によって便宜的なグループに分類し、出現する曲目と曲中の位置とあわせ、次頁の表 4 に示した。

以下、表 4 におけるグループごとに、調査を通じて認められた直政本の胡麻点の出現法則と、推測される特性について述べる。

表 4 直政本中の 6 曲にみられる胡麻点一覧

グループ	種類	形状	出現曲目と位置（下線で表示）
直線	①	—	《兵庫》（「霞【 <u>かすみ</u> 】の <u>うち</u> 」）、《四国落》（「 <u>されは</u> 」）など全曲を通じて頻出
	②	\	《兵庫》（「霞の <u>うち</u> 」）、《四国落》（「荻【 <u>をぎ</u> 】に」）など全曲を通じて頻出
折れ線 （非対称）	③		《兵庫》（「あまり」）、《四国落》（「あしや」）、《文覚》（「さくら」、「さむからて」、「村雨に」、「雲上」の管絃講、「なかは」）、《老人》（「いつも」、「長【ちやう】生殿の裏【うち】には」、「とむなる」）、《松の枝》（「奈の枝」、「ひな鶴」、「亀の」、「なれや」、「きよき」、「ひろき」、「ありかたき」）、《山科》（「いにしへも」、「植【うへ】て」、「奈【まつ】を」、「曳【ひく】」、「風【かぜ】」）
	④		《文覚》（「ぬれて」）、《老人》（「わかくなり」）
	⑤		《四国落》（「つ <u>の</u> くに」）、《文覚》（「 <u>ちり</u> しきて」、「管絃講【 <u>こう</u> 】」）
	⑥	」	《山科》（「色【 <u>いろ</u> 】」）
曲線	⑦	つ	《四国落》（「 <u>らん</u> 」、「 <u>のふ</u> 」）、《老人》（「 <u>うち</u> には」）、《山科》（「 <u>やま</u> の」）
複合的	⑧	ハ	《松の枝》（「君か <u>ため</u> 」）

直線グループ

全曲を通じて出現し、出現箇所に適応されている曲節型や、テキストの統辞論的あるいは発音上の特徴は様々である。これらのことから、安信本ならびに長明本における直線グループの胡麻点と同様の働きをしているといえる。直政本における直線グループの胡麻点は 2 種類であり、この状況は安信本に近い。

折れ線（非対称）グループ

直政本では、「折れ線」と「曲線」の描写について、それほど有意な差がみられない。そのため、今回の調査では、安信本⑤、⑦にそれぞれ機能を同じくする直政本の胡麻点を、一つのカテゴリ、すなわち③に分類してしまっているおそれがある。

実際に、③については、曲節型とも、テキストの統辞論的あるいは発音上の特徴とも、一定の結びつきを見出すことはできなかった。ただし、出現位置については、安信本や長明本における折れ線（非対称）グループの胡麻点と多く対応していたので、ある程度の関連が想像される。

④は 2 例のみであるが、両例とも文節の末尾にみられる。

⑤については、曲節型〔フシ〕との結びつきを指摘できる。一方で、特定のテキストの特徴との関連は確認できない。

⑥は 1 例のみであり、機能を推測することは難しい。

曲線（鋭角）グループ

⑦は、《四国落》の「らん」、「のふ」、《老人》の「うちには」の 3 例において、撥音および長音との関連を指摘できる。出現位置からも、同じ形状の安信本⑧や長明本⑩に通ずる機能を持つことが推察される。ただし、《山科》における 1 例は、通常の音価による音に付せられたものであり、例外的である。

複合的グループ

1 例しか存在しないため、機能を推測することは難しい。ただし、出現位置が、長明本における複合的グループの胡麻点⑩と対応していることは、特筆に値する。

以上、直政本における 8 種類の胡麻点の性質を述べた。

3-4. 分析結果の比較を通じて

以上の分析結果から、次の 3 点を導くことができる。

(1) 胡麻点のグループと曲節型の関係

3 種類の本に共通する傾向として、直線グループに分類される胡麻点は、曲節型に関係なく用いられている。一方で、折れ線グループに分類される胡麻点については、フシ類の曲節型との頻繁な結びつきを指摘できる。

(2) 複数の本で一貫した機能を持つ可能性のある胡麻点

長明本における胡麻点⑨と直政本における胡麻点④は、同じ形状を持ち、かつ、本調査においては 100%、文節の末尾に現れている。また、同様に同じ形状を持つ安信本⑧、長明本⑪、直政本⑦は、長音や促音といった、通常と異なる音価を持つ音に対して付されることが多い。また、安信本⑨と長明本⑫は、ともに母音 /i/ と関連している可能性がある。

(3) 長明本の記譜法の特異さ

安信本や直政本に比べて、長明本は (1) 用いている胡麻点の種類が多く、直政本の倍に及ぶこと、(2) 胡麻点と「上」、「中」、「下」の表示を連動させていること、(3) 特に折れ線（非対称）グループにおいて、胡麻点とテキストの統辞論的特徴に一定の結びつきがみられること、という 3 点で、非常に特徴的である。長明本のこうした性質は、明らかに、胡麻点の視認性を高め、誤読のリスクを減らし、ひいては記譜法自体の精度を高めるという方向に働いている。

おわりに

以上のように、毛利家本歌謡集 3 種の分析と比較を通じ、幸若舞の本において、胡麻点がどのように機能しているかを考察してきた。

結果、特定の種類の胡麻点と、特定の統辞論的ないし音声学的特徴をもったテキスト上の箇所について、ある程度呼応関係を見出すことができた。また、長明本における胡麻点の用法が、際立ってシステマティックな性質を持っていることも明らかになった。これらのことから、胡麻点を基底とする幸若舞の記譜法は、常に一定のフレームワークの内部にありつつも、いくつかのバリエーションを持ちうるものであるといえる。また、長明本のわずか 2 年後に成立した直政本の記譜法が、約 70 年先行する安信本により近いことから、こうした記譜法の変化は、時代の要請といったものよりも、むしろ制作に関わった個人の意志を反映していると考えられる。

長明本を制作した幸若庄太夫長明（1641-1707）は、由緒書『幸若由緒二付長明書留』（1706

年成立)のなかで、家元である親族の男性から幸若舞の指導を受けただけでなく、並川検校に師事して平家を習ったという自らの経験に言及している。また、幸若歌謡に関する網羅的研究を成した柴田幸子が、長明本を「どの歌謡集より詳しい曲節や注を付けて」と評している(下線筆者)。これらのことから、長明は、特に熱心な仕事をする人物であり、また、幅広い視野をもって自由に幸若舞の伝統に向き合っていたことが伺える。今回の調査を通じ、長明のそうした姿勢が、曲節や注の詳細だけでなく、胡麻点の用法の合理化という形でも長明本に現れていたことが明らかになった。

本研究は、公益財団法人日東学術振興財団より助成を受けて行っております。

また、2017年2月、福井県越前町の郷土史家である山口信嗣氏にお会いし、当地の研究施設「幸若情報文化センター」にて、数々の貴重な資料を見せていただくとともに、研究について、多くのご指南を賜りました。厚く御礼申し上げます。

¹⁴ 朝日町誌編纂委員会編 1995: 61。

¹⁵ 柴田 2013: 349。

参考文献

- 朝日町誌編纂委員会編. 1995.『朝日町誌』. 福井県丹生郡朝日町役場. 1巻.
- 蒲生郷昭. 2002.『『語り物』の用語史』. 時田アリソン, 薦田治子編.『日本の語り物——口頭性・構造・意義』. 国際日本文化研究センター. 19-38頁.
- 蒲生美津子, 久万田晋. 1990.「大江幸若の音楽様式——段と曲節型」. 吾郷寅之進, 福田晃編.『幸若舞曲研究』. 三弥井書店. 6巻: 18-50頁.
- 金田一春彦. 2003.「四座講式の研究」.『金田一春彦著作集』. 玉川大学出版部. 5巻.
- 笹野堅. 1938.『幸若舞曲集 序説』. 第一書房.
- . 1943.『幸若舞曲集 本文』. 第一書房.
- 柴田幸子. 2013.『新典社研究叢書 244: 幸若歌謡の研究』. 新典社.
- 村上學. 2004.「幸若舞曲の諸本」. 福田晃編.『幸若舞曲研究』. 三弥井書店. 別巻: 103-124頁.
- 横道萬里雄. 1960.「解説」『日本古典文学大系 40: 謡曲集』. 岩波書店. 上巻: 5-28頁.
- . 1992.『岩波講座 能・狂言』. 岩波書店.
- 横山重, 村上學. 1980.『毛利家本——舞の本』. 角川書店.

表 5 毛利家本歌謡集 3 種の収録曲と章段の一覧

曲名	安信本	長明本	直政本
《一天平》	×	一天平かにして	×
《松の枝》	×	常盤なる松のえ	松の枝にはひな
《長生殿》	×	長生殿のうちに	×
《山科》	×	山科の山の岩根	山しなのやまの
《天下泰平》	×	天下泰平國土安	×
《老人》	老人は若くなり	老人はわかくな	老人はわかくな
《四季の節》	×	あら面白のやつ	×
《都あたり》	×	都あたりの里・	×
《大織冠》	かまたりたひの みやこを立て大	都を立て大唐の 海漫々としては	×
《百合若大臣》	伊勢のくに荻ふ	伊勢の國荻吹あ	×
《兵庫》	霞のうちの山さ	霞のうちの山桜 湊川さいだかし	霞のうちの山さ
《十番切》	×	大友の左近将監	×
《硫黄ヶ嶋》	黒雲あつくへた	×	×
《司土》	都に名残うきお	×	×
《四國落》	されば荻にあま	音にきこえたる されば荻にあま	されば荻にあま
《新曲》	むかし業平か戀	×	×
	みやもいまは御		
《満仲》	しかるあひた一	×	×
	是によつて一大		
《入鹿》	×	×	こんこつのさう
《夜討曾我》	×	あら面白の名山	×
《文覚》	ころは卯月上旬 住吉さかいうち	比は卯月の上旬	ころは卯月上旬
《蓬莱山》	×	酒に数多の威徳	×
《熊野落》	×	とかむる事はな	×
《湊川》	×	正成是を最期の	×
《日本記》	日本國のあはち	日本我朝は小國	×
《腰越》	×	これや天智天皇	×
《静》	司土うとましか	彼若宮と申はう	×

章段はその冒頭の 7 字をもって示した。

また、二つ以上の本に共通する章段は下線によって強調した。